

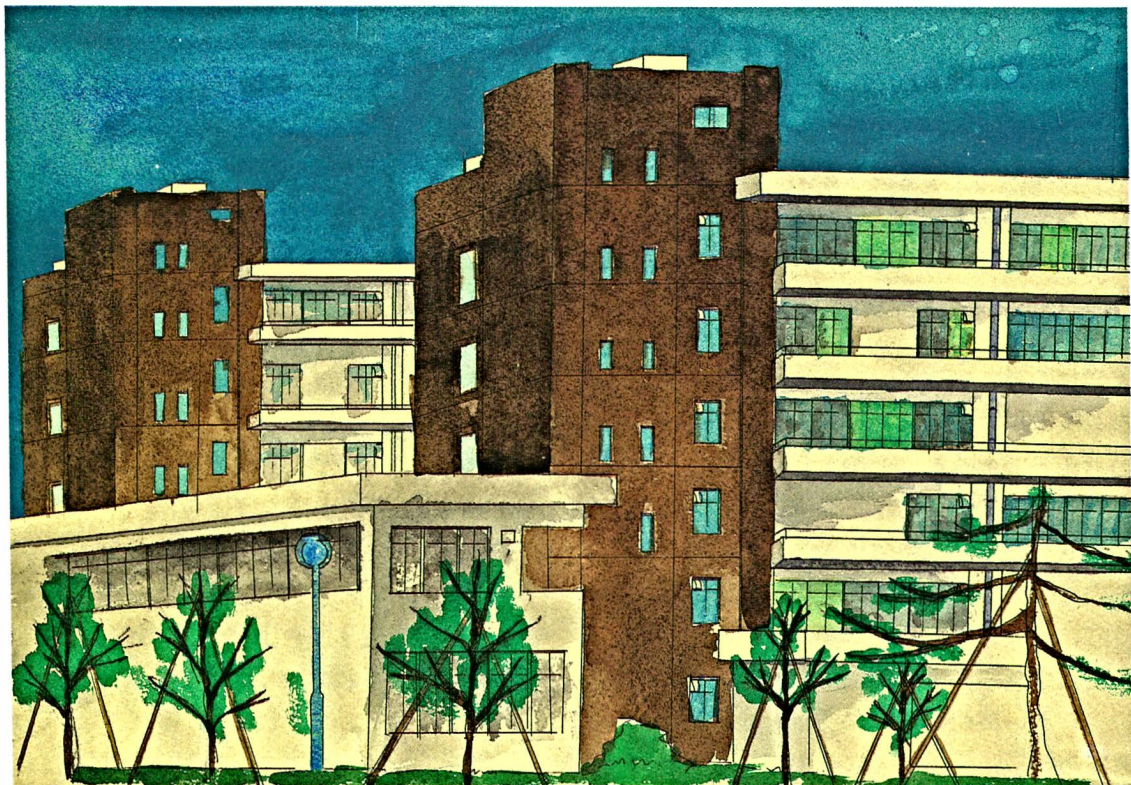
学園ニュース

富山大学

NO. 49

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和60年10月11日



学内風景(その14) 工学部

笠嶋 富士幸

◇◇◇◇ 目 次 ◇◇◇◇

所感 ー創造性豊かな人材育成についてー	富山大学長 大井信一	2
新任教官紹介及びあいさつ		3
モスクワにて	人文学部助教授 矢沢英一	4
ヒマラヤ氷河調査こぼれ話	理学部助教授 對馬勝年	6
「LOGOを使った教育環境」	教育実践研究指導センター助教授 山西潤一	7
THE CHERRY BLOSSOMS AND I	中国政府派遣研究留学生(工学部) 魯 軍偉	8
ロイトリンゲン教育大学での留学を終え		
……………教育学部小学校教員養成課程(教育心理学)4年次生	福光 隆	11
昭和60年度富山大学公開講座		12
学部・学生部・保健管理センターだより		16

所 感

－ 創造性豊かな人材育成について －

富山大学長 大 井 信 一

近年、科学技術の振興、経済社会の発展、教育・文化の向上などに関連して、大学の教育・研究に対し、産業界はじめ社会の各方面から多くの期待と要請が寄せられている。とりわけ、資源の乏しい我が国が厳しい国際環境の中で今後とも経済的発展を遂げていくためには、これまでの導入型技術開発から自主的、創造的な研究開発へ転換していくことが不可欠であり、そのため最も必要とされるのは基礎研究の充実である。技術の高度化、多様化に伴ない多分野の協力による学際的研究もますます重要になってくる。こうした基礎的あるいは学際的な研究は一企業の手にあまる面がある。それを大学における研究活動との協力、連携によって補い、創造的な科学技術の芽を育成したいと云うのが産業界の考え方であろう。このような社会的諸要請に対する大学の対応については基本的に、(1) 大学の学術研究は、教官の自由な発想による。主として基礎的研究活動の展開による独創的、先駆的な研究成果の蓄積によって、学術研究の高い水準を維持しながら優れた人材を養成するのが本来の使命であり、この使命を果たしていくことが長期的にみた場合、社会的要請に応える本道である。(2) 大学はこの使命と立場にもとづいて、その主体性のもとに、社会の各方面から寄せられる個別的、具体的な諸問題の解決のため、大学における研究成果の蓄積や大学の研究能力を活用し、積極的に研究協力していく必要があり、このような活動は、大学本来の研究活動の活性化にもつながり有意義なことである。の2点であると思われる。特に後段(2)の産学協同あるいは連携については、学部、学科または研究室が、関係諸施策中の適当なチャンネルを使って推進すればよいわけで、地方にある国立大学は地域社会の発展のため、大いに協力すべきであると考えるところで、前段(1)の大学の使命である人材の養成に関して、近年かなり厳しい社会的要請がなされている事は周知の事である。実際に、今やどの企業も低成長時代に生き残るために、独創力があり創造性豊かな人材の育成に躍起になっている。企業活動を構成する

要素として、人・物・金の三つがあげられるが、物と金とを動かすのは結局人であり、人材の開発育成の成否が企業の将来を左右すると言っても過言ではない。したがって、企業は現在の大学教育にあきたらず学卒の新入社員を社内教育で徹底して再教育しており、その時間と経費は企業にとって莫大な負担となっているそこで、機会ある毎に、企業側が大学教育に対する要望として異口同音に問題発掘能力、独創的思考法や積極的姿勢(やる気)を身につけさせて欲しいと言う。臨教審第一次答申にも「21世紀に向けて社会の変化に対応できるよう特に必要とされる資質・能力とは、創造性や自ら考え、自ら表現し、行動する力である」と指摘されている。これらの資質・能力の育成が今後の学校教育の重要課題であり初・中教育から高等教育まで一貫し継続した対応が必要である。戦後の教育改革において六三制の導入がなされたが、明治以来の教え込む一覚える式の教育・学習手法はそのままで、欧米型の才能を引き出す一自から考える式の訓練はほとんどなされていないのが実状であろう。それは海外に手本を求めてそれに追いつく事が努力目標であった経済的社会的環境または要請があったためと思われる。今やこの前提条件がなくなったのだから、発想の転換をして創造的資質や能力の開発に重点をおくべきであろう。幼稚園から大学迄、程度の差こそあれ、絶えず問題意識をもたせ、“疑問を発見する能力”、“自ら解決する能力”を育成することが大切である。富山県総合教育センターの報告によれば、昭和58年度より「学校教育における創造性の育成」の具体的方策を明らかにするための調査研究を続けており、県内の児童生徒を対象として創造性の実態を調査するとともに、創造性と知能、創造性と学力、創造性と性格や環境等との関連について興味ある結果を報告している。さらに、創造性を育てる理科の学習指導において、創造性を引き出し、伸ばす方策等についてもいろいろ調べている。これらを踏まえて大学教育においても画期的な方策等を検討する必要があるだろう。電算機プログラムと

同様に、人間の頭脳にもロジックとデーターとを分けてインプットしておく必要がある。同じく学習すると言っても、ロジック学習とデーター学習は別に論じなければならない。区別しないと教育内容は重複し、複雑化し、混在してしまう。またロジックも形式論理一辺倒ではなく、もっと広く考えて、例えば組合せのためのもの、変化をもたらすためのものや正反対のものを正当化するためのもの等が創造性をつけるためには是非必要なものと思われる。ロジックだけでは具体的に

何かを創造することは不可能でデーターが必要である。どのようなデーターを蓄積しておけばよいかはまた別の問題であり別の学習である。これからの社会においては知識・情報などを単に獲得するだけでは新しい事態に対応できない。それを適切に駆使し、自分の頭でものを考え、創造し表現する能力を育成しなければならない。知識本位から方法尊重へ転換しなければならないのではないかと。

◇◇◇◇◇ 新 任 教 官 ◇◇◇◇◇

◎ 田代 発 造 助手(工学部) 6 0.5.1
昭5 4. 3 富山大学大学院工学研究科
修士課程修了
担当: 工業計測

◎ 成 田 節 講師(教養部) 6 0.5.1
昭5 7. 3 東京外国語大学大学院外国語
学研究科修士課程修了
担当: ドイツ語

U タ ー ン 着 任 に あ た っ て

工学部助手 田代 発 造



この5月から本学工学部に帰ってまいりました。と申しますのは、私は本学を修了後、東京農工大学で技官として勤めておりました。東京を離れた一人であったわけです。しかし田舎の良さを忘れられず、舞い戻って来たという次第であります。これについて、私は負け犬になったのではないと強く言いたい。もともと富山が好きだからであります。

こちらに来ますと、工学部のほとんどが五福地区に移転しており、昔の工学部がなつかしく高岡へまいりました。あの銀杏並木をねこそぎ五福へ持って行きたいという衝動にかられ、銀杏の木を押しましたが、びくともしません。この銀杏も故郷である高岡が好きなのです。私と同類なのでしょう。高岡にいますと学

生時代を思い浮べることが多く、現在の立場を忘れがちです。自分が先生方の仲間入りしたことが不思議でなりません。

以前から私は富山大学を誇りに思っております。それは富山大学が地元と密接な関係を持っていることです。公開講座があり、卒業生の就職も半数が県内であり、なによりも県民から愛されています。これは富山大学が地元から必要とされている表れであると考えられます。ここに働くことのできる私は幸せ者です。

さて、富山に戻ることができた喜びに、いつまでも浸っていることはできません。ほんの6年間でしたが他大学での修行を生かし研究に教育に精一杯の力を注ぎたいと考えております。まだまだ経験不足の若輩者でございます。教職員の皆さま、そして学生の皆さん宜しくお願いいたします。

新任にあたっての自己紹介

教養部講師 成 田 節



育ちは横浜です。横浜と東京以外で生活をするのは初めてです。こちらへ来るまで、富山について殆んど何のイメージもありませんでしたが、実際に住んでみると、山あり川あり田圃あり、自転車で少し行けば日本海ですから、これは儲かった、と喜んでいます。

修士課程修了後、この4月末まで3年1ヶ月、青山学院大学などでドイツ語の授業を担当してきました。以前は授業も単位認定も甘い方でした。(と自分では思っています。)最近、徹底的に学生に勉強させなければ意味が無いのでは、と考え直し、過激な授業を心掛けています。

研究領域は現代ドイツ語の統語論及び意味論で、こしばらくは格と前置詞にまつわる問題を中心に研究

しています。

趣味は、山歩き、サイクリング、スキー、日本酒研究などです。(一部は予定)以前は、映画、コンサート、芝居、踊りなど、お金を払って暗い所に座るということをよくしましたが、せっかく富山に来たからには、上に挙げたような、地の利を生かし、かつ健康的なものへと方向転換をするのが賢明でありましょう。また、料理と言えるほどのものではありませんが、食べる物を作るのは好きな方です。富山では、季節に応じて新鮮な魚が安く手に入るのが助かります。みぎす、あかばちめ、つばいそなど、初めて見るような魚も少なくありませんが、人から焼き方を教わりながら味を楽しんでいます。

以上、大変アンバランスではありましたが、簡単に自己紹介をさせていただきました。よろしくお願ひいたします。

モ ス ク ワ に て

人文学部助教授 矢 沢 英 一

モスクワには8ヶ月滞在したが、その間個人的に知り合いになったロシア人の数はそれほど多くなかったし、ましてや家にまで招いてくれるような人はごくわずかだった。そのわずかな人たちとは世界文学研究所のK教授、T教授、演劇評論家のS女史などであったが、私の方からすすんで頻りに訪れたのは、そういういわば専門分野の人たちではない、ごく普通の市民Gの家だった。

G一家とは実はもう12年来の付き合いになる。といっても過去に会ったのはただ一度、1972年にはじめてモスクワに行ったとき、偶然道を訊ねたことがきっかけとなって知り合い、家にも呼ばれてごちそうになった。以来、細々とではあるが文通を続け、今回12年ぶりに会ったわけだが、一家はまるで昨日別れ

た友人を迎えるように迎えてくれた。Gは画家(フドージニク)という肩書だが、実際には病院付属の研究所で医療器具の考案、設計などの仕事に従事している。奥さんは12年前は大学の実験技師として働いていたが、一人息子のI君が病弱であったため、やがて仕事をやめて家庭に入り、いまは機械編物の学校に通っている。もうじきその教師の資格がとれるのだと張りきっている。Gが46歳で奥さんが40歳。当時2歳だったI君もいまは14歳で10年制学校の8年生。学校は彼らの家からまさに指呼の間、徒歩1分のところにある。

Gの給料は月250ルーブリ(1ルーブリは約300円)で、ソヴィエトでは並の給料だが、奥さんが働いていないので家計はそれほど楽ではないようだ。彼自

身の考案した医療器具が採用されると100ルーブリとか300ルーブリとかの一時金がもらえるという。それでまとまったものを買うのだと奥さんは話していた。住居も狭い。居間・客間・寝室兼用の部屋、I君の部屋、それに台所があるだけだ。しかし、その狭い住居は常に清潔で、しかも家具調度に手づくりのぬくもりが感じられる。Gはまことに器用な人間で、ちょっとした家具は自分でつくってしまうし、修理もお手ものだ。外れそうになった私の眼鏡の枠を直してくれたのも彼だった。その彼の手になる作り付けの棚が部屋の片側の壁をいっぱい塞ぎ、もう一方の壁には同様に彼の手になるエッチングや風景画が何点か飾られてある。ガラスの嵌った上段の棚には絵画、文学関係の本がぎっしりと並び、下段には一時金で買ったという大きなテレビ、日本製のステレオなどが納められている。窓側に食卓があり、その上にはいつでも熱いお茶が飲めるサモワールがでんと置かれている。部屋の真ん中に藤の安楽椅子が二つ。その一つがいつしか私の指定席になってしまった。

日曜日の午後になると私はこの家に自然に足が向いてしまうのだった。何か用事ができて行かないことがあると、次の週奥さんは私の顔を見るなり、一体どうしたのだ、風邪でもひいたのか、食事はちゃんととっているかなどと質問を浴びせてくるのだった。部屋に入ると、まず卓上のサモワールで沸かした熱いお茶で身体を暖める。やがて奥さん自慢のリング入りのピローグが出る。ピローグをほおぼり、ジャム入りのロシア茶をたっぷり時間をかけて飲みながら、よもやま話をしたり、テレビを見たり、音楽を聞いたりする。話といっても珍しい話題がそんなにあるわけではない。はじめの頃こそ互いに12年間の空白を埋めるべく話題に事欠かなかったが、それも尽きれば、あとは退屈なよもやま話。それに、こちらの語学力の問題もある。ただ、例外として何度でも飽きずに話せるのは己れの子供のこと。この点に関しては世界のどこの親も変りがないようだ。

I君は、母親に言わせれば、学校の勉強はあまり熱心にやらない。熱心なのはオブラスツォフ人形劇場での活動だ。日本にも度々やってくる、世界的に有名なこの人形劇場の付属サークルに、彼は学校の授業が終ると毎日のように駆けつける。将来この劇場で働くことが彼の夢である。その夢を実現させるのは、しか

し、容易なことではないらしい。当面はまず現在の10年制学校でしっかり勉強して、演劇関係の大学へ入る地固めをしなければならない。ところがI君を含む8年生全員がそのまま上級学年へ進級できるわけではないのだ。8年生最後の成績如何では学校を去り、各種職業技術学校へ進まなければならない。I君の学校では9年生へ進級するのは全体の中のほぼ半数であるという。さらに「悪い」ことに、I君の学校は普通の10年制学校であり、「大学進学に有利な」特別学校ではない。特別学校とは特定の科目をより重点的に教える学校で、たとえば「英語特別学校」「仏語特別学校」「音楽特別学校」などがある。I君の学校では英語の授業は8年生では週1時間しかない。大学をめざそうとする子の多くが家庭教師について勉強しているのも周知の事実だ。だからI君の成績が目下よいかからといって決して安心してはいられない。「いまが一番大事な時期なのに」と奥さんは人形劇場の活動にうつつをぬかしているわが子について嘆息まじりに言う。

一方、父親のGには別の次元で息子の将来を案じている気配がある。I君はいま14歳。4年後には2年間の兵役義務に服さねばならない。幼い頃病弱であった彼はいまでもスポーツを好まず、冬に不可欠な戸外の散歩さえ厭う。これで果して兵役に耐えられるだろうか。テレビで海外ニュースを見ているときなど、Gは不意に私に向って、アフガニスタンの問題は日本ではどう報道されているか、などと問いかける。彼の真剣な表情を前にして私は思う。もしかしたら彼は画面に映る兵士たちに数年後の息子の姿を重ね合わせているのかもしれない。いや、絶対にそうだ。もし自分が彼の立場だったら絶対にそうだろう。しかし、そう思う一方で、私は現実には自分が彼の立場にいないということからくる安堵感（幸福感？）に半ば浸っているのだが。

われわれおとなたちが話をしている間、I君はそばでテレビを見たり、われわれの話に耳を傾けてたりしている。時折、もの問いたげにその賢そうな顔をこちらに向けることがあるが、こちらから話しかけなければ口を開くことはない。

ロシアの冬は長く、夜も長い。吹雪の夜など程よく暖房のきいた部屋でサモワールのお茶を飲みながら過ごすのは何とも心地よい。夕飯をごちそうになったあと、ワインがきいてきてしばらくうとうとし、気がつ

いてみればはや10時、私はここでようやく重い腰を上げるのである。

ヒマラヤ氷河調査こぼれ話

理学部助教授 對馬 勝年

この度、名大水圏科学研究所の氷河調査隊に加わりネパールヒマラヤを訪れる機会を得た。

ネパールがどういうところなのか、よくわからないままカトマンズ空港から案内されたのは、こじんまりした一軒家であった。居間の壁にはネパールの大地図が張られ、ヒマラヤ関係の参考書・報告書が並べられ、日本から運んだという浴槽、ベッドルーム、倉庫などがある。調査隊長の渡辺極研教授ら有志が拠金し合って建てたものという。氷河調査の他、地質調査、生物調査隊の拠点として利用されてきた。

カトマンズの目抜き通りバザールには間口2間ほどの店が連なり、十字路の狭い広場にも野菜・果物の露店がひしめき、雑踏をかきわけて人力車が通る。

それと対照的に道幅の広いニューロードには近代的な店やスーパーマーケットも見える。

中心街を離れると、人間よりも尊いとされる牛が思いのままに足を運び、路上には寝そべる犬または犬の群れがあり、そのまわりをニワトリがエサを求め、ヤギが通る。誰が飼主なのかも判然としない。動物と人間が混然一体となって生を営んでいるように見え、強く感動した。これに加え、無抵抗主義の一端をしのばせるネパール人の穏やかな振舞いに接していると、競って軍事拡大を目指す文明国の愚かさが反省される。

若きピレンドラ国王の下に、平和・安全を維持しながら、世界屈指の山岳美を生かした観光開発によって国を興そうと努力しているネパールに声援を送りたかった。しかし、何と云ってもカトマンズの衛生状態の悪いのには閉口した。トイレのない住宅が多く、オンボロタクシーの巻き上げる土ほこりに雑菌が舞い、我々のような外来者はカゼ、喉の炎症、下痢などの風土病に悩まされる。

6月のカトマンズは日毎に強くなる世界最大級の季節風“モンスーン”の支配下に入り、夜毎に激しい雨が降る。

カトマンズに着いて2週間目、トラックが来た。

1,500kgの観測器材・食糧、20人のポータを満載

してヒマラヤ山脈のランタン地域に向け出発した。トラックはトリスリを抜けて快調に進んだが、標高2,000mのドンチェに到着する直前、突然ドンという音がして車が山側へ大きく傾いた。前輪のスプリングが折れたのだ。

野営。サーダらがテントを作り、コックが食事を作る。ポータらはそれぞれに焚火をし炊事をする。トラックの回りやカルカ（遊牧のため生活する小屋）に夜を明かしていた。

ここからは徒歩となる。朝、ドンチェから下山の人たちの中にポータに合流した人も多かったようだ。ポータは一人32kgのダンボール箱を背負って、シャブルー、ラマホテル、ランタン村を経て、標高3,800mスイス人が建てたというキャンチェンの山小屋をめざす。

ランタン川に沿って登ってゆくと、世界で最も美しい谷の一つと絶賛されるランタン谷に入る。大昔の氷河に削られた雄大なU字谷は大草原におおわれ、氷河の運んだ巨石があちらこちらに散在している。周囲には万年雪を頂いた6~7,000m級の山々が延々と続く。谷の右端を流れるランタン川は白波を立てて、深いV字谷を形づくっている。

6月のヒマラヤは高山植物のお花畑が美しかった。キャンチェンの山小屋から標高4,500mに到る大草原は各種の高山植物で彩られていた。1,000m以上もあろうと思われる山の斜面が紫色に染められていたりする。

ここの大草原にはヤクも集まってくる。牛に似た家畜で長い毛をもっている。高地のため植物の生育は遅く、その草をヤクの群れはなめ尽すように食べてゆく。そのため、新しい草原を求めて遊牧しなければならない。

高山では空気が薄い。そのため呼吸は深くなり、脈拍は100を越す。安静時も90を下らない。寝ても覚めても運動状態にあるようなもので、疲労が徐々に蓄積し、3日目には観測器材の整理をしていても体力

が続かずヘナヘナと坐り込んでしまう。高山病の前兆のようだ。午後の予定は一切とり止めてぶらぶらすることに決める。幸い、3日目の夜を経過して脈拍は徐々に平常値に戻っていった。体内に酸素摂取を増す機構が発生したのであろうか。これで無事、高所順応はできた。

帰路、ラマホテルでは白波を立てて流れ落ちる激しい音に悩まされているうちに、夜が明けてしまった。朝の目覚めは快適であったが、ドンチェへの下山の途中、急速に体力が衰え、決して休むなと言われた登山道で何度も坐り込んでしまった。足に吸いついた山ヒルは三匹、四匹とかたまりになって、鮮血が靴下

じみ、腹部についたヒルは血を吸ってコロコロに太っていた。登山靴は鉄の塊りのように重く感じられ、苦汁をなめたが、辛じてドンチェにたどりついた。

ドンチェ発のミニバスはモンスーンの大雨による土砂くずれで不通。翌日は階段のような急な道をトリスリに急いだ。ホテルに着いたのはホテルの飛び交う夜であった。

生水を飲むなと戒められた山歩きでは咽の乾き通しであった。帰国したら、思いっきり冷たい水を飲みたかったものだが、日本につくや、贅沢な食生活に汚され、ネパールでの貴重な体験も無駄に終りそうで残念だ。

特 定 研 究

「LOGOを使った教育環境」

教育学部 教育実践研究指導センター

助教授 山 西 潤 一

筆者は幸いにも昭和59年度、60年度とLOGOを使った学習支援システムの開発研究に文部省の科学研究費を受けることができた。研究の紹介をして欲しいとのことなので、ここに簡単に研究の一端を紹介してみたい。

世の中、情報化社会ということでコンピュータ化が種々の分野で進んできている。こと教育の分野においても例外ではなく、CAI（コンピュータ利用教育）がパーソナルコンピュータの普及とあいまって学校現場に急速な勢いで広まってきている。

さて、本研究は筆者自身、このようなCAIにまったく賛成できないという考えから始まった。ここで現行のCAIについて少し紹介しておこう。現在CAIの主流をなしているものは、フレーム型CAIといって子供一人一人の能力に応じて学習を進展させるとうたわれているものである。そこでは、まずコンピュータの画面に問題がでてくる。解ければ次の問題、さらに次の問題。間違うと程度の低い問題に戻る。コンピュータの性能やソフトウェア技術が進んで、かなり複雑なフィードバックが可能となっている。一時期プログラム学習が流行したが、そのコンピュータ版だと思えば良い。いかに効率よく既存の知識を覚え込ませるか（子供の理解度に合わせて）ということにコンピュータが利用されている。どう考えたかということより

も、正しい答えがいかに速くだせたかということが問題とされる。そこでは結果のみが問われるのであって、過程はまったく入ってこない。子供達は必然的に公式的な暗記に頼って解答を出してくることになる。社会の中でコンピュータ化を問題にする時、コストパフォーマンスが問題とされるが、こと教育においてこの考えには筆者は賛成できない。このようなCAIに対して「電子ページめくり機」という批判的なことばも生まれている。

もっと教育的な使い方ができないものか。これでは子供達もコンピュータも可哀想である。そのような考えから本研究が始まった。

それでは、LOGOを使った教育環境とはどんなものか紹介しよう。LOGOというのはコンピュータ言語の一種で、言語的にはプロログやリスプ等の人工知能型の第五代言語の仲間である。この言語は1970年代にMITのパパート教授によって開発された。教育用言語として注目されるのは、そこにピアジェの教育思想が反映されているからである。すなわち、最適な教育環境が与えられれば、子供は自から学ぶ能力を持っている。LOGOではこの教育環境のことをマイクロワールドと呼んでいる。そして、このマイクロワールドをいかに設定して、子供達に知的な思考体験を行なわせるかということが重要な研究課題である。

LOGOの世界では擬人化された亀が答場する。この亀さんは、我々が知識を獲得するのと同じような方法で種々の知識を獲得し、その知識により推論し課題解決を行うことができる能力を持っている。ここで、この亀さんに知識を与えるのは、実はコンピュータに向かっている子供達自身なのである。子供達は与えられた課題をどう解決するか、自分自身で考えると同時に亀さんに教えることで、又、亀さんが課題解決をする様子を見ることにより、その考えの正しさや誤り、そこに含まれている法則などを発見的に学習していくのである。この亀さんとの会話に難しいコンピュータの記号論理はまったく不要である。日常のことば、それも身体の動きに対応した簡単なことばで会話することができるのである。又、ことばそのものを作り出すこともできるのである。さらに、LOGOを使った教育環境のもとでは、子供達がLOGOという共通の言語でそれぞれの考えを持ちより、さらに大きな問題に取り組むといったようなことも可能である。いわゆる階層的なプログラミングで、Aの知識とBの知識を加え合わせることによってA+Bの知識が生成されたり、時にはまったく思いもよらないCの知識が生成された

りするのである。この問題により子供達の間コミュニケーションが生まれる。僕の知識を貸してあげるから君の知識を貸してよといった具合に、教室はたちまち社交場と化するのである。従来のCAIに見られる子供達の間でのコミュニケーションの欠除はまったく存在しない。

子供達のアイデアは無限である。一つの課題に対しても種々の解決法が生まれてくる。従来のCAIと基本的に異なるのは、結果の良し悪しではなくこの課題解決の過程を大事にすることである。認知心理学の立場で考えれば、子供達がある課題に対してどのような解決方略を生みだすか、非常に興味ある問題であり、現在その分析も進めている。又、課題に対する子供達の思考過程が詳細に分析できれば、新しい教授法を生みだすことにもつながるのである。

コンピュータは日に日に進歩している。この素晴らしい道具も使い方によってはまったく無益なものになるばかりでなく、時には有害なものにさえなる。教育的とは何かを問いながらコンピュータ利用の教育を考えている昨今である。

THE CHERRY BLOSSOMS AND I

中国政府派遣研究留学生(工学部) 魯 軍 偉

I left Beijing for Tokyo with excitement on April 11th of this year.

In my memory, this is the best season for enjoying the cherry blossoms, so I hoped that the plane would arrive in Tokyo as quickly as possible.

When we arrived at Narita airport in Tokyo, the car which was sent to welcome us had been waiting for a long time. On the way to the Chinese Embassy in Tokyo, I tried to find some cherry blossoms but was very disappointed that the cherry blossom season was over in Tokyo. I did not imagine then that I could see the cherry blossoms that I liked best in some other place this year. I thought that I would have to wait till next spring.

Next morning I took an express train from Tokyo to Toyama by myself. The train passed many unknown cities and towns. When I unconsciously looked out of the window, the unmelted snow covering all the mountains and plains came into my view. Suddenly some strange desolate feeling came over me. I began to feel depressed by something I did not know myself. At last I did arrive at Toyama station at 3 o'clock in the afternoon. When I got off the train, I found my teacher, Mr. Murai, other university officials

and some Chinese students had come to meet me at the station. That evening I was invited to a good Japanese dinner by my guidance teacher, Professor Kagawa. Afterward, accompanied by my teacher, I went to my room which had been well prepared for the necessities of life. I was deeply moved in seeing that. That night I did not fall asleep until very late. I thought about many things that had happened in the day. My worry gradually went away like melting snow.

On my second day in Toyama, the teachers and students in the same laboratory held a cherry-viewing party to welcome me to the Toyama university. When I was told that the cherry trees were in full bloom in Toyama, I could hardly believe my ears. "How lucky I am!" I shouted. No sooner had we come into the park than I was enchanted by the beautiful cherry blossoms at their peak. The cherry trees moving their branches full of blossoms in gentle breeze, looked like they were welcoming me -- the newcomer. We enjoyed looking at the cherry blossoms while drinking sake and eating Japanese food. The meeting was full of a cordial and friendly atmosphere. At that very moment, my heart was filled with happiness. The cherry blossoms brought back to my mind my university days 11 years ago.

....

It was the first spring after I became a university student. After Yalan magnolia had bloomed, some unknown pink blossoms came into bloom. One day my classmates and I walked down this avenue of the cherry trees in the school yard. When we saw such beautiful blossoms, no one could help stopping and admiring them. But we did not know what to call them until someone told us. "Oh, they are cherry trees; they are really from Japan." Everyone got excited when they found out that the trees were from Japan. From then on, I have been interested in cherry trees and have fallen in love with cherry blossoms, because the cherry is the emblem of friendship between the Chinese and Japanese peoples. Also, I unconsciously began to be interested in Japan and the Japanese language. I bought Japanese text books and dictionary, started studying Japanese, though I knew that I could never have a chance to go to Japa. Unfortunately, after graduation I was busy with research work, and had to stop my Japanese study.

A real chance to go to Japan arrived in December, 1983. When I passed the national examination of English for going abroad. My first application was the U.S.A., because I could speak English. However the number of the people allowed to go there was limited, so I had to choose between Japan and two west European countries. In the end I chose Japan, even though

I could not speak Japanese. Perhaps it is a result of loving the cherry and I could not bear to part with her. The main reason, however, was that Japan is an advanced country. Its leading science and technology and its rapidly developing economy made me decide to go to Japan. Once again I started studying Japanese.

....

I was suddenly awakened from my long happy reverie by the sound of excited laughter from another group. Looking around at everything, I realized that I was in Japan. From that day I began my new university life in Toyama university

How time flies! I have been here for four months now. Thanks to the profound concern and help of my teachers, university officials and Japanese students, I have gradually adapted myself to these new circumstances and have learned a lot of things. Wherever I have gone I found the people refined and courteous. If I lost my way, they were always kind enough to show me the right way. The owner of the house I am living in often helped me when I was in trouble. In the past four months, I have visited many places — research institutes, power plants, art museums, stadiums and new public buildings in Toyama. I found that while developing its economy and science and technology with all its strength, Japan also pays great attention to its public installations and collective welfare institutions. Japan has combined the civilization of modern society with its traditional national culture, to become Today's Japan. All of these things have left a deep impression on me. After the second world war, the Japanese people actively expanded production, and the economy, science and technology developed rapidly in a short time. The living standard of the people continues to rise. In less than 30 years, Japan has become one of the advanced countries in the world

Japan's success has made people think, what has happened and how they have done it in Japan. "Japan heat" appeared in China in recent years. The situation of Japan's culture, science, technology and economy were often discussed in Chinese newspapers and magazines. Study of language is also very popular in China. Only English has more students than Japanese. Japanese movies, cartoons, TV dramas and songs are welcomed by Chinese people. The cherry has become a favorite blossom in China. The exchanges of economy, trade, science and technology between the two countries continues to develop along with friendly exchanges of people. I hope that the friendship between the Chinese and Japanese peoples will grow like the cherry tree that has deep roots and luxuriant leaves, and blossoms every year.

ロイトリンゲン教育大学での留学を終えて

教育学部小学校教員養成課程 福 光 隆
(教育心理学)4年次生

私は1984年9月～1985年7月までの11カ月の間、西ドイツのバーテン・ヴェルテンベルク州にあるロイトリンゲン教育大学で留学する機会を得ました。ロイトリンゲン市は、西ドイツ南西部(北緯48度29分34, 東経9度12分45)に位置し、海から離れているため、1年を通して温度差が激しいところです。私の滞在中にも冬-27℃, 夏 35℃を記録しました。しかし、日本に較べて湿度が低いためか、過ごしやすく感じられるところです。

この町の歴史は比較的早く、5～6世紀のアレマン人の入植に始まります。第二次世界大戦の際には、この町も大打撃を受けたのですが、戦後、昔の町並をとどめるように復興され、今は素適な町並を歩くことができるようになっていました。ロイトリンゲンに限らず、私が訪れた西ドイツのどの町も美しく整った町並で、へんな表現になるかもしれませんが、心の故郷に帰ったような気持をあげました。日本に比べると高い山もなく、広々としているせいかもしれませんが、私の見たドイツ人の生活姿勢は、大変余裕を持って心から楽しんでいるように感じられました。

私が西ドイツの地に足を踏み入れたのは今年の9月9日でした。最初は言葉がうまく通じなくて緊張の連続でした。大学の勉強は10月中旬からでしたので、それまでの1カ月間、ロイトリンゲン教育大学の好意で、近くの国民学校に開設されている外国人のためのドイツ語会話教室に通いました。私の通っていたクラスには、イラン、ユーゴスラビア、ギリシャ、トルコ、スリランカ、ベトナム、フィリッピン、ガーナなどからの多くの人々もいました。それらの人々の多くは、難民、亡命者、ガストアルバイターと呼ばれる外国人労働者でした。彼らは自国で事前にドイツ語を習ってきたわけではないようで、話すドイツ語はめちゃくちゃでした。しかし、なんとか伝えようと一生懸命にジェスチャーをまじえながらしゃべろうとする姿勢や、できるだけ多くしゃべろうとする姿勢には感心させられました。伝達手段としてのことばの習得には、このような姿勢が必要不可欠なんだなあとつくづく思い知らされました。また、この会話教室において、様々な国々の人々からそのお国の事情を聞くことができ

たことは、留学生活での素晴らしい体験の1つでした。

ロイトリンゲン教育大学では、冬・夏の2学期間の講義・ゼミナールを受けました。授業に出席して驚かされたことは、学生達が積極的に(これは当然のことだと思います)発言をし、参加していることでした。しかし、参加している学生全員が積極的であるということではなく、中には編み物をしながら聴いている女子の学生もいました。

2学期間の中で、特に私の印象に残った授業は心理学的童話解釈やドイツ民主共和国(東ドイツ)についての政治学のゼミ、初歩授業のための教育実習ゼミなどでした。

心理学的童話解釈の講義は、その長い童話諸研究の歴史に基づいて、1つ1つの童話を様々な面から、特に、そこに展開される人間の心の葛藤の様子などを刻明に解釈したものでした。例えば、「シンデレラ」ならば、そこにおける父親・母親の役割や意味、またこの童話の中でキーポイントとなっている靴は何を象徴しているかなどについて、かなり詳しい分析を試みる内容のものでした。授講以前のたかが童話という私の傲慢な考えは、したがってどこかに飛んでゆかざるを得ませんでした。

東ドイツについての政治学のゼミは、夏期にあったのですが、それに先だつ休暇中に私は幸運にも東ドイツを訪ねる機会を得ました。その折のことですが、東ドイツから西ドイツへ帰る際、国境にはてしなく続く柵と厳重な警備体制を目のあたりにして言葉を失ってしまいました。そういったこともあり、このゼミには大きな興味を持って参加しました。このゼミは膨大な資料と学生自身が自分の問題として真剣な姿勢で取り組んでいたので内容の濃いものでした。

また、教育実習ゼミナールについては、初歩授業の教育実習であり、基礎学級1・2年(7・8才児)で行なったのですが、言葉の関係から、私は授業は行なわず、授業援助者として参加しました。低学年の児童を相手に、手とり足とりで教えなければならない場面に多く遭遇し、とても苦勞をしました。私の会話能力の限界に加え、子どもの言葉が方言であったり、子供特有の不明確さによって、理解できなかったことが多

くあり、意志を伝えるのに苦労したことが今は懐しく思い出させられます。授業そのものは、低学年ということもあってか、多く遊びの要素が取り入れられているようで興味深いものでした。最後の授業のとき、私は子供達に日本の童話“泣いた赤鬼”をドイツ語でお話したのですが、私のまずい発音をなんとか理解しようと子どもたちは真剣な目なぞしで、静かに聴いてくれた光景を一生忘れることはできません。

私は、テオドル・リットハウスという寮に住んでいたのですが、そこでの生活も忘れることができません。私の住んでいた部屋は216号室でした。この部

屋は私の前に10人の本学の先輩留学生の方々が住んでいらっしやったのです。寮にいる学生達はみな親切で、その中から多くの友人を得ることができました。そして、私の留学生活もそのおかげでどうにか最後まで続いたと感謝しています。留学中に得たいろいろな経験を生かし、これからの富山大学での勉強にいつそう励んでいきたいと思っています。最後に、私に留学の機会を与えて下さった先生方、その留学を私にとって有意義なものにして下さった先生方、私の留学生活に有意義なアドバイスを与えて下さった先輩の方々に心から感謝いたします。

昭和60年度富山大学公開講座

— 現代史に学ぶ(その2) —

時の流れは過去、現代、未来と続く1次元1方向性のものであるという捉え方がある。私達が未来につなげる現代をより有意義に生きて行く為には、近い過去である各分野の現代史に学ぶところが多い。その意味で59年度に取り上げた分野と違う各分野の現代史を考察する。

(講座の名称)

現代史に学ぶ(その2)

(開設期間)

昭和60年10月18日(金)

～ 11月9日(土)

(開設日数及び時間帯)

10日間、午後6時～午後8時

(ただし、11月9日(土)は14時～16時)

(講座内容)

回数	期 日	講 義 題 目	講 師 氏 名	所 属 ・ 職 名
1	10月18日(金)	胡麻の現代史	小林貞作	理 学 部 教 授
2	21日(月)	自由社会と労働法	小 嶋 典 明	経 済 学 部 助 教 授
3	23日(水)	正義論の系譜と現代的正義	駒 城 鎮 一	教 養 部 教 授
4	25日(金)	中国の現代文学史	三 寶 政 美	人 文 学 部 教 授
5	28日(月)	生活における省エネルギー技術の動向	宮 下 尚	工 学 部 助 教 授
6	30日(水)	過去100年間に発生した集団ヒステリーについて	中 村 剛	保健管理センター教授
7	11月 1日(金)	日本人と衣服	松 川 三 郎	教 育 学 部 助 教 授
8	6日(水)	磁性の現代史	佐 藤 清 雄	理 学 部 教 授
9	8日(金)	日本経済の現代史	佐 藤 良 一	経 営 短 期 大 学 部 助 教 授
10	9日(土)	材料科学における最近の進歩	大 岡 耕 之	工 学 部 教 授

(募 集 人 員)

一般成人 70名(先着順)

(会 場)

富山大学工学部101講義室

(受 講 料)

3,000円 講習料の分納はできません。なお、既納の講習料は還付しません。

(申 込 期 間)

昭和60年9月17日～10月17日)

(申込み・問合せ先)

〒930 富山市五福3,190 富山大学庶務部庶務課まで ☎(0764)41-1271(内線205, 206)

一 富山の雪を考える 一

56, 59 豪雪に続いて60年にも大雪に見舞われ、雪についての対策と研究もまた本格的な取り組みがはじまっているが、大学内でもこれまでの個々の研究を総合化しようとする動きが出てきた。この公開講座ではその研究内容を中心に報告するとともに「克雪」「富山まちづくり」を受講者の皆さんとともに考えたい。

(講座の名称)

富山の雪を考える

(開設期間)

昭和60年10月22日(火)

～ 12月10日(火)

(開設日数及び時間帯)

15日間、午後6時～午後8時

(講座内容)

(募集人員)

一般成人 70名(先着順)

(会場)

富山市民学習センター(旧富山市立市民病院跡)

(受講料)

4,000円 講習料の分納はできません。なお、既納の講習料は還付しません。

(申込期間)

昭和60年9月20日～10月21日

(申込み・問合せ先)

〒930 富山市五福3.190

富山大学庶務部庶務課まで

☎(0764)41-1271(内線 205, 206)

回数	期 日	講 義 題 目	講 師 氏 名	所 属 ・ 職 名
1	10月22日(火)	北陸の雪	藤井 昭二	教養部教授
2	24日(木)	雪の性質(1) 雪の利用、活用の展望	對馬 勝年	理学部助教授
3	29日(火)	雪の性質(2) スキー・スケートは何故すべるか	〃	〃
4	31日(木)	なだれ(1)	中川 正之	理学部教授
5	11月 5日(火)	なだれ(2)	川田 邦夫	理学部助手
6	7日(木)	公開実験(於:富山大学)	中川, 對馬, 川田	
7	12日(火)	南極の雪氷	川田 邦夫	理学部助手
8	14日(木)	雪の化学	水谷 義彦	理学部教授
9	19日(火)	雪と植物	小島 覚	教養部教授
10	21日(木)	企業の雪対策	多々 静夫	工学部教授
11	26日(火)	地域社会の変化と雪対策	中藤 康俊	経済学部助教授
12	28日(木)	雪国における街づくり	實 清隆	教育学部助教授
13	12月 3日(火)	雪と条例	萩野 聡	経済学部助教授
14	5日(木)	富山の都市構造と「克雪」政策	桂木 健次	教養部教授
15	10日(火)	雪についての懇談会	座長 藤井 昭二	

－ 21世紀に向かつて教育を考える －

教育の見直しが政府をはじめ各界で行われている。このような時期に21世紀を指向するため現代の教育がどのような問題を含んでいるかをできるだけ基礎的に市民の皆様と考えたい。

(講座の名称)

21世紀に向かつて教育を考える

(開設期間)

昭和60年9月18日(水)

～ 10月11日(金)

(開設日数及び時間帯)

10日間、午後6時～午後8時

(募集人員)

一般成人 70名(先着順)

(講座内容)

(会場)

富山大学教育学部第2講義室

(受講料)

3,000円 講習料の分納はできません。なお、既納の講習料は還付しません。

(申込期間)

昭和60年8月15日～9月17日

(申込み・問合せ先)

〒930 富山市五福3,190

富山大学庶務部庶務課まで

☎(0764)41-1271(内線205, 206)

回数	期 日	講 義 題 目	講 師 氏 名	所 属 ・ 職 名
1	9月18日(水)	I 学歴社会から学習社会へ ① 学歴社会について	山野井 敦 徳	教育学部助教授
2	20日(金)	② 現代青少年の意識と問題行動 (登校拒否・非行など)	塚 野 州 一	教育学部助教授
3	25日(水)	③ 学習社会の展開	山野井 敦 徳	教育学部助教授
4	27日(金)	II 文化と教育 ① 文化と教育	観 山 雪 陽	教養部教授
5	30日(月)	② 教育と文化	大 塚 恵 一	教育学部教授
6	10月 2日(水)	③ 技術(テクノロジー)と教育	吉 田 順 作	工学部教授
7	4日(金)	④ 教育と技術(テクノロジー)	宮 崎 州 弘	教育学部助教授
8	7日(月)	⑤ 自由と教育	武 井 勲	経済学部助教授
9	9日(水)	⑥ 教育改革の展望	屋 敷 平 州	教育学部教授
10	11日(金)	III 教育を考える シンポジウム	座 長 大 塚 恵 一	

－ 健康・スポーツ教室 －

市民のスポーツに対する関心を高め普及するため、ジョギング、硬式テニス、バドミントンを選んで、そ

れぞれ専門的な理論、実技の指導を行う。

(講座の名称)

健康・スポーツ教室

(開設コース・募集人員・受講対象等)

開設コース名	募集人員	受講対象者	備 考
ジョギングコース	20名	一般男女	
硬式テニスコース	40名	婦 人	テニスシューズとボール2個持参, ラケットは貸出可
バドミントンコース	20名	一般男女(初心者)	ラケットは貸出可

(開設期間)

- ・ジョギングコース 昭和60年9月17日(火)～10月 4日(土)の下記日程の9日間
- ・硬式テニスコース 昭和60年8月22日(木)～ 8月26日(月)の下記日程の5日間
- ・バドミントンコース 昭和60年9月17日(火)～ 9月25日(水)の下記日程の7日間

(日程・開講時間)

コース	月日	9/17 (火)	19 (木)	24 (火)	26 (木)	28 (土)	30 (月)	10/2 (水)	4 (金)	5 (土)
ジョギングコース		6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	6:00～ 8:00 2時間	16:00～ 20:00 4時間

コース	月日	8/22(木)	23(金)	24(土)	25(日)	26(月)
硬式テニスコース		9:00～13:00 4時間	9:00～13:00 4時間	9:00～13:00 4時間	9:00～13:00 4時間	9:00～13:00 4時間

コース	月日	9/17 (火)	18 (水)	19 (木)	20 (金)	21 (土)	24 (火)	25 (水)
バドミントンコース		9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 12:00 3時間	9:00～ 11:00 2時間

(会場)

- ・ジョギングコース 富山大学グラウンド(雨天の場合は第1体育館)
- ・硬式テニスコース 富山大学テニスコート(雨天の場合は第2体育館)
- ・バドミントンコース 富山大学第1体育館

(受講料) 3,000円 講習料の分納はできません。なお、既納の講習料は還付しません。

(申込期間) 昭和60年7月29日～8月21日

(ただし、ジョギングコース及びバドミントンコースは、9月14日まで受け付ける。)

(申込み・問合せ先) 〒930 富山市五福 3,190 富山大学庶務部庶務課まで

☎(0764)41-1271(内線205, 206)

(講座内容)

ジョギングコース 教育学部教授 山地啓司

ウォーミングアップの方法, トレーニング方法とスケジュールの作り方, 走り方, コースの選定法, シューズの選び方, レースへの参加と準備の進め方等について

硬式テニスコース 教育学部助教授 山下三郎 教養部助教授 北村潔和

体力診断及び体力増進法, ストロボ等による技術診断, 実技では各種ストローク, サーブ, ボレー, スマッシュ等の基礎技術とゲームの進め方

バドミントンコース 教養部助教授 福田明夫 教育学部助教授 西川友之

バドミントンを始めるための知識, フライトと基本ストローク・ショット, 構えとフットワーク, ゲームの進め方と審判, 勝つための理論と戦法, トレーニングとプログラム

☆☆☆☆☆☆学 部 だ よ り☆☆☆☆☆☆

◇ 教育学部

日本科学教育学会第9回年会報告

教育学部教授 林 良 重

去る7月30日より8月1日まで、本学教養部および教育学部附属教育実践研究指導センターを会場にして、日本科学教育学会第9回年会在下記のとおり開催

されましたので、紙面をおかりして報告させていただきます。

	9:00	9:30	11:00	12:00	13:00	16:00	17:00	19:30	
7月30日(火)	受付	総会 (D会場)	A	理科教育	A	教科教育		(名鉄トヤマホテル) 懇親会	
			B	教育情報処理	昼	B	教育情報処理/教育評価/環境教育		
			C	数学教育	休	C	C A I		
			D	総合科学教育	み	D	総合科学教育		
			E	C A I	E	教育メディア/教材開発			

7月31日(水)	シンポジウム 「コンピュータ時代の 科学教育のあり方」 (D会場)	A	理科教育	A	理科教育	A: A会場	
		昼	B	環境教育/教材開発	B	環境教育/教材開発	B: B会場
		休	C	数学教育	C	数学教育	C: C会場
		み	D	情報処理教育・他/教育情報処理	D	情報処理教育・他/教育情報処理	D: D会場
		E	E	教師教育/C A I	E	教師教育/C A I	E: E会場 (VTR使用)

8月1日(木)	A	理科教育
	B	総合科学教育
	C	教材開発
	D	教育メディア
	E	教材開発

本学会の会員は、小・中・高校および大学の教官約1,300名ですが、第9回年會に参加したのは約300名でした。

科学教育といえば、いわゆる理科教育だけを指すかのように思われがちですが、さに非らず、プログラムにみられるとおり、教育情報処理、教育評価、環境教育、数学教育、C A I、総合科学教育、教育メディア、教材開発、情報処理教育、教師教育、理科教育など実に多彩なセッションがありました。

またシンポジウム「コンピュータ時代の科学教育のあり方」は、国立教育研究所芦葉浪久氏と筆者の司会で、江沢 洋氏(学習院大学理学部)、金岡幸二氏

(インテック)、佐伯 胖氏(東京大学教育学部)、寺下陽一氏(金沢工業大学計算器センター)、藤崎博也氏(東京大学工学部)のメンバーで行なわれました。フロアからの多数の意見・質問があり、熱気があふれ時間の不足が痛感されました。

3日間の会期中全く晴天に恵まれ、実行委員会の一致協力のもとに大成功のうちに学会を終了しましたが、これ一重に学長、教養部長、教養部の事務、教育学部の事務の方々の物心両面にわたるご支援の賜物と、心から感謝いたしております。この紙面をおかりして改めて深謝を申し上げ、年會の報告といたします。

再び家政学について

教育学部教授 中 川 眸

本学園ニュース第25号において、筆者は家政学について述べたが、その冒頭の一節は次のようなものであった。

「私は家政学に身をおいている。日本学術会議の研究分野の分類に従えば、家政学は7つの学術部門のうちに入っていない。つまり、まだ学問として認められていないということかもしれない。そういう分野に身をおく——これは当事者にとっては自ら選んだ道とはいえ、限りなく哀しいことである。……自分のおかれている場を卑下しなければならない罪人のような意識——家政学への哀しみ——これが私に在外研究員としてドイツへ留学することを思いたたせ、勇気をふるい立たせ、かつ努力を強いたことは事実である。」

以上のような一文を書きながら8年目、本年学術部門第6部に独立して家政学はその名を連ねた。家政学会の学術的活動は名実ともに学術会議法の規定を満たし学問としての市民権を得たのである。思えば1949年新制大学の成立と同時にいくつかの大学に家政学部が設置されて30有余年の歳月を経たことになる。今や家政学領域での学位(学術博士)を、医学、工学、

農学、社会学などの分野に宿を借りずに取得できるようになった。

近年、筆者は家政学の国際会議につとめて出席するようしてきた。1983年の第1回アジア地区家政学会議、1984年オスローでの第15回国際家政学会議(4年毎の開催)、そして本年ソウルでの韓日合同家政学シンポジウムなどである。これらの会議で家政学を支える世界の同志が論じあったことは、科学技術の著しい進歩が人類に与えるインパクトと、これに対処すべき家政学の役割は何かということであった。それらを具体的にここで述べる紙幅はないが、家政学は複雑な生活環境の学術的基礎研究、生活実践、家政教育を3本の柱として独自の学問的独立を果そうとしているのである。

教育学部家庭科での講義、演習、実験、実習などは以上述べたような歴史的経過に基づく理念を以って行われなければならない。学生も今や学問分野としての市民権を得た家政学について正しい認識をもち、この家政学を基盤とする家庭科教育を義務教育の場に生かしてもらいたいものである。

教育実践研究指導センターだより

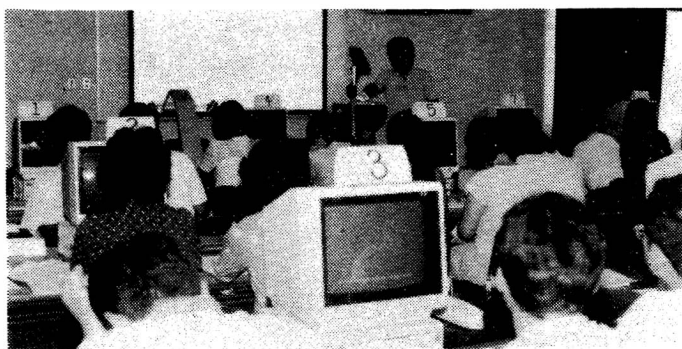
◇ 公開講座 — LOGOを学ぶ —

昭和60年度富山大学教育学部公開講座「マイクロコンピュータの教育利用 — LOGOを学ぶ —」が8月26日(月)～28日(水)の3日間に渡って、教育実践研究指導センターで開催された。

本講座は、センターが小・中学校の現職教師を対象に開いたもので、今年度は、教育用コンピュータ言語LOGOについて学び、具体的な教材作成技法を修得するとともに、その望ましい活用方法、新しいコンピュータ利用教育の可能性などについて考えていこうというものであった。LOGOを使ったCAI(コンピ

ュータ利用教育)は、従来のドリル型のCAIと異なり、子供達に創造性や問題解決能力を養成する新しいタイプのCAIとして現在最も注目されているものである。

講座には県内各地から44名の先生方が参加され、センターの山西潤一助教授の指導のもとに授業実践研究室で16台のマイクロコンピュータを使用して講義と演習が行なわれた。学校現場にコンピュータの導入が盛んに図られている今日、その望ましい活用方法をめぐって苦慮しておられる先生方が多く、皆熱心に受



熱心にLOGOを学ぶ現職教師

講された。特に、LOGOのタートルグラフィックを使用してのシミュレーションやリスト処理を使用した言葉遊びなど、まったく新しいコンピュータの使い方に変に興味を示される先生が多く、最終日の討論会では、LOGOを使った新しい教育の可能性について白熱した議論が展開され、成功りに講座を終えた。

***** 学 生 部 だ よ り *****

第 3 5 回 北陸三県大学学生
交 歓 芸 術 祭 日 程 表

昭和60年10月19日～12月1日

期 日 部 門 別	10月				11月										12月	
	19 (土)	20 (日)	26 (土)	27 (日)	2 (土)	3 (日)	14 (木)	15 (金)	16 (土)	17 (日)	22 (金)	23 (土)	24 (日)	30 (土)	1 (日)	
管弦楽																富山市公会堂 富山大学 学生会館
軽音楽	富山大学 学生会館															
合 唱					富山大学 黒田講堂 教養部											
美 術											富山産業展示館					
書 道								富山大学 黒田講堂 教育・教養部								
茶 道											高岡市内寺院					
放 送												西別院 (富山市内)				
落 語					富山大学 学生会館											
邦 楽			富山大学 学生会館													
写 真											富山大学学生会館					

第37回北陸地区国立大学体育大会 団体成績一覧表

種	目	優勝杯	1位	2位	3位	4位	5位	
男	陸上競技	金沢大学長杯	金沢	富山	福井	富医薬	福医	
	野球	富山大学長杯	金沢	富山	福井			
	庭球	富山県体育協会長杯	富山	富医薬	金沢	福井	福医	
	軟式庭球	石川県知事杯	富山	金沢	福井	富医薬		
	卓球	金沢市長杯	金沢	福井	富山	富医薬	福医	
	バトミントン	福井市長杯	金沢	福井	富山	富医薬		
	バレーボール	福井県知事杯	富山	金沢	福井 富医薬		福医	
	サッカー	石川県知事杯	金沢	福井	富山 福医		富医薬	
	ラグビー・フットボール	富山県知事杯	金沢	富山	福井	福医	富医薬	
	剣道	福井県議会議長杯	金沢	福井	富山	富医薬	福医	
	柔道	富山県議会議長杯	金沢	福井	富医薬	富山	福医	
	バスケットボール	福井大学長杯	金沢	福井	富山 富医薬		福医	
	水泳	福井大学学生部長杯 金沢市議会議長杯	富山	金沢	福井	富医薬	福医	
	ヨット	石川県議会議長杯	富山	金沢	福井	富医薬		
	準硬式野球	福井大学父兄後援会杯	福井	富山	金沢	富医薬	福医	
	子	ハンドボール	金沢大学長杯	金沢	富山	福井	富医薬	
空手道		福井市長杯	福井	福医	富医薬	富山	金沢	
弓道		富山大学長杯	金沢	富山	福井	富医薬		
体操		福井市議会議長杯	金沢	福井	富医薬			
自動車		金沢大学長杯	富山	金沢	福井			
女		陸上競技	富山県体育協会長杯	金沢	福井	富山	福医	富医薬
		庭球	石川県議会議長杯	金沢	福井	富山	富医薬	福医
	軟式庭球	福井県体育協会長杯	金沢	富山	富医薬	福井		
	卓球	石川県体育協会長杯	富山	福井	金沢	富医薬		
	バドミントン	福井県教育委員会杯	福井	金沢	富山			
	バレーボール	富山大学後援会長杯	金沢	富山	福井			
	剣道	金沢大学長杯	金沢	富山	福井	富医薬	福医	
	バスケットボール	富山市議会議長杯	金沢	福井	富山 富医薬		福医	
	ソフトボール	井村杯・北信杯ソフトボール協会旗						
	弓道	小杉スポーツ杯	金沢	富山	福井	富医薬		
水泳	福井大学長杯	富山	金沢	福井	富医薬			

昭和60年度北陸地区国立大学体育連盟表彰者(本学分)

◎ 陸上競技部

麻場公禎 (富山大学人文学部人文学科
昭和59年度卒業)

実 績

昭和56年度	第55回北信越学生陸上競技対校選手権大会	100M	11"3	3位
	第33回北陸四大学学生総合体育大会	100M	11"6	3位
	〃	200M	22"7	1位
	富山県国体予選	200M	22"1	1位
	北陸選手権	200M	21"7	1位
	国民体育大会	200M	22"30	参加
	北陸三県対抗学生陸上競技大会	200M	22"3	1位
昭和57年度	第56回北信越学生陸上対校選手権大会	200M	22"2	1位
	第34回北陸地区国立大学体育大会	100M	11"3	1位
	〃	200M	23"2	1位
	第13回北信越陸上競技選手権大会	100M	11"5	1位
昭和58年度	第37回富山県クラブ対抗陸上競技大会	100M	11"2	3位
	〃	200M	22"2	1位
	第57回北信越学生陸上競技対校選手権大会	100M	10"9	1位
	〃	200M	22"0	1位
	富山県国体予選	200M	22"6	2位
	富山県選手権	200M	22"0	2位
	全日本学生陸上競技選手権大会	100M	11"24	参加
	〃	200M	22"48	参加
昭和59年度	第38回富山県クラブ対抗陸上競技大会	100M	11"1	1位
	〃	200M	22"2	1位
	第58回北信越学生陸上競技対抗選手権大会	100M	11"0	1位
	〃	200M	21"6 (追風参考)	
	第35回北陸地区国立大学体育大会	100M	10"8	1位
	北陸三県対抗陸上競技大会	200M	22"0	2位
	全日本学生陸上競技選手権大会	100M	11"15	参加
	〃	200M	22"50	参加
	第15回北信越学生陸上競技選手権大会	100M	10"8	1位

◎ 参 考 北信越学生陸上競技連盟最優秀選手賞受賞

全学就職説明会

全学就職説明会が去る6月19日(水)教養部4番教室で開催されました。

説明会には4年次生約300人が出席し、リクルート名古屋支社の土屋洋次長を講師にむかえ就職戦線の

状況、企業選択の方法、企業の求める人物等について講演がありました。続いて質疑応答にはいり学生から種々質問がなされ盛況のうちに終了しました。

① 正課中
体育の実技中

区分	男	女	計
バスケットボール	1 (1)	5 (4)	6 (5)
バレーボール	1 (1)	3 (1)	4 (2)
サッカー	2 (1)	1 (1)	3 (2)
柔道	2 (2)		2 (2)
競走		1	1
走幅跳		1 (1)	1 (1)
跳箱		2 (2)	2 (2)
マット運動		1 (1)	1 (1)
計	6 (5)	14 (10)	20 (15)

理工系実験実習中

事故原因	男	女	計
ガラス器具の破損		1 (1)	1 (1)
薬品の付着	2 (2)		2 (2)
実験装置組立中	2 (2)		2 (2)
滑走面テスト中	1 (1)		1 (1)
植物採集中		1	1
計	5 (5)	2 (1)	7 (6)

その他

区分	男	女	計
場所移動中		1 (1)	1 (1)
計		1 (1)	1 (1)

② 学校行事中

行事名	男	女	計
大 学 祭	1		1
スキー講習会		3 (2)	3 (2)
計	1	3 (2)	4 (2)

④ 休憩・その他

区分	男	女	計
学校施設内の事故	3 (2)		3 (2)
計	3 (2)		3 (2)

③ 課外活動中

部 名	男	女	計
バスケットボール	4 (4)	2 (2)	6 (6)
バレーボール	1 (1)	1 (1)	2 (1)
サッカー	2 (2)		2 (2)
準硬式野球	1 (1)		1 (1)
硬式野球	2 (2)		2 (2)
ソフトボール		6 (4)	6 (4)
ラゲビー	2 (2)		2 (2)
軟式庭球	1 (1)		1 (1)
バドミントン	1 (1)	2 (1)	3 (1)
柔道	6 (3)		6 (3)
合気道		1 (1)	1 (1)
空手道	1 (1)		1 (1)
弓道	1 (1)		1 (1)
水泳	1		1
計	23 (19)	12 (7)	35 (26)

⑤ 事故発生場所
(どの場所が多いか)

場 所	件 数	割 合
体 育 館	23 (17)	32.8 (32.6)
グラウンド	18 (14)	25.7 (26.9)
武道場	11 (8)	15.7 (15.3)
実験・実習室	5 (5)	7.1 (9.6)
道路・通路	5 (2)	7.1 (3.8)
スキー場	4 (3)	5.7 (5.7)
テニスコート	1 (1)	1.4 (1.9)
バレーボールコート	1 (1)	1.4 (1.9)
プ ー ル	1	1.4
階段・廊下	1 (1)	1.4 (1.9)
計	70 (52)	100.0 (100.0)

⑥ 傷害種類別件数(男女別)

傷 害 名	男	女	計
骨 折	8 (7)	6 (5)	14 (12)
捻 挫	12 (10)	15 (11)	27 (21)
脱臼	1	1 (1)	2 (1)
打撲	3 (1)	1	4 (1)
肉離れ	2 (2)		2 (2)
突き指	1 (1)	1	2 (1)
切 傷		1 (1)	1 (1)
アキレス腱損傷	1 (1)	2 (1)	3 (2)
挫 傷	2 (1)	2 (2)	4 (3)
靱帯損傷	2 (2)	1	3 (2)
半月板損傷	2 (2)	1	3 (2)
眼底出血	2 (2)		2 (2)
皮膚炎	1 (1)		1 (1)
関節炎	2 (1)	1	3 (1)
計	39 (31)	31 (21)	70 (52)

***** 保健管理センターだより *****

健康のめやす

保健管理センター 中村良子

今年は稀れに見る猛暑、熱帯夜が続きました。学生の皆さんには、冷たい飲み物の摂りすぎや、寝冷えなどで「お腹の具合が悪い」とか「体重が目立って減ってきた」といった問題がありませんか。これから気候が変わる時期に入りますので、自分の健康をチェックして見るのが大切です。皆さんは自分の体調や健康状態については良く知っていると思われるでしょうが、もう一度自分の健康状態について見直し、少しでも変化があったときには速やかに保健管理センターの方へ相談においでください。健康であればどんなに楽しく勉強が出来るか、あらためて申すまでもないことですが、わずかな油断から楽しい学園生活が出来なくなった例もあります。そのようなことのないように、健康に対する認識を新たにするため、下記の「健康のめやす表」を部屋など

に貼って、1日1回は眺めて、ああ今日は50点だ、70点だと自分なりに採点して下さい。100点満点の体調だと思う日は、ひとりでに心も軽く教室に足が向くと思われます。皆さん、頑張って健康状態観察を続けてみて下さい。
 ④自己の平均体温を知らない学生さんが多いので、この際に知っておくと病気したときには、とても都合が良いと思われます。平均体温を出す方法は朝、起きる直前に腋窩（わき下）を良く乾いたタオルでふき体温計を5分間（1分計でも）充分に入れて計って下さい。1週間測定し平均して割り出して下さい。もし続けることができないときは時々でもよいですから計測し、それを割り出すという方法でも結構です。

健康のめやす表

呼吸	15～20回（1分間）
脈拍	男子65～75 女子70～80（1分間）
体温	36～37℃（5分間充分に計る）
血圧	最高140mmHg以下 最低90mmHg以下
尿の状態	男子1,000～1,600cc/日 女子800～1,200cc/日 ④ ①いきおいが良い ②色は琥珀色 ③残尿感がない
便の状態	毎日規則正しい排便1～2回 硬からず軟からず、悪臭がない、色は大体黄かっ色。
体重	標準体重（身長－100）×0.9
顔の表情	顔色がよく、つやもあり、眼に光がある。顔がはれていない。
食欲	食欲があり、おいしい。
睡眠	ぐっすり眠れ、すっきり目がさめる。
活気	活気にあふれ、物ごとに積極的にとりくむ。
疲労感	翌日に疲れがのこらない。
気になる事	くよくよしてもすぐ立直れる。
気になる症状	肩こり、頭痛、めまい、のどが乾く、このような気になる症状がない。あっても2～3日休養をすればすぐ治る。

④ 尚、当センターでは血圧、検尿はAM8:30～11:30の間は自由に測定に応じます。

昭和59年度保健管理センター利用状況

性別 学部別	男子学生						女子学生							
	人文	教育	経済	理	工	教養	合計	人文	教育	経済	理	工	教養	合計
内科的疾患・症状	35	25	77	53	27	85	302	31	26	5	19	0	23	104
感冒・頭痛	13	4	23	19	3	23	85	4	7	1	1	0	8	21
咽喉炎・扁桃腺炎	16	8	49	17	10	54	154	15	22	1	5	1	25	69
胃腸の障害・下痢	0	0	1	1	0	4	6	3	1	0	1	0	1	6
起立性調節障害	0	0	0	0	1	4	5	1	1	0	0	0	3	5
貧血	3	4	4	2	4	4	21	2	2	1	3	0	4	12
その他	12	51	75	85	51	154	428	15	59	3	14	0	58	149
外科的疾患	21	22	32	29	10	66	180	14	48	0	8	0	43	113
切・刺・擦過傷	4	10	20	8	1	29	72	5	20	0	7	0	10	42
打撲・つき指・捻挫	2	0	1	14	3	17	37	0	18	0	4	0	3	25
筋肉・関節の痛み炎症等	4	0	16	6	1	14	41	0	5	0	0	0	0	5
火・熱・凍傷等	0	0	0	2	0	5	7	1	4	0	0	0	1	6
癌・よう・瘍疽等	0	1	0	0	0	8	9	0	2	0	0	0	2	4
虫さされ・咬傷	5	0	5	5	5	26	46	2	5	0	0	0	4	11
骨折・脱臼	1	6	22	29	4	25	87	12	9	6	10	0	26	63
その他	1	0	2	0	1	10	14	1	1	0	0	0	3	5
眼科疾患	5	1	11	11	4	28	60	4	12	3	4	0	13	36
耳鼻科疾患	0	1	15	4	1	7	28	1	1	0	2	0	4	8
皮膚・泌尿疾患	0	0	0	0	0	0	0	6	11	0	5	0	10	32
歯・口腔科疾患	0	0	1	3	0	0	4	0	2	0	2	0	1	5
生理痛	7	4	11	5	4	27	58	5	12	2	6	0	11	36
その他	2	1	5	1	1	3	13	2	0	1	2	0	4	9
血圧	0	3	4	2	0	5	14	0	2	0	0	0	1	3
尿	2	1	3	0	1	7	14	3	3	1	1	0	1	9
その他の検査	2	4	9	4	2	14	35	10	12	0	5	0	19	46
健康・栄養相談	15	23	35	31	10	83	197	17	35	3	10	0	40	105
休養	150	169	421	331	144	702	1,917	154	320	27	109	1	318	929
病院紹介														
合計														

在籍学生数5,063名(男3,501名,女1,562名)

***** 学園ニュース編集委員 *****

学生部長	本田 弘	理学部	松本 賢一
人文学部	山口 幸祐	〃	広岡 公夫
〃	榎木 謙周	工学部	多々 静夫
教育学部	佐々木 浩	〃	杉本 益規
〃	山本 都久	教養部	高安 和子
経済学部	正 亀 芳 造	〃	山 本 孝 一
〃	中 藤 康 俊		